

まとめ

8

桜島をまるごと博物館にする試み



福島 大輔
FUKUSHIMA Daisuke

NPO法人桜島ミュージアム
理事長

エコミュージアムとエコツアーのコンセプトを参考に、桜島全体をまるごと博物館と考え、現地で本物を見て、体感し、楽しみながら学べるような「まちづくり」を目指すNPO法人桜島ミュージアム。火山とともに暮らす地域の取り組みの一つを紹介する。

地域社会の発展に寄与するエコミュージアム

エコミュージアムとは1960年代にフランスで提唱された新しい博物館の考え方で、地域に存在する自然・歴史・文化・産業などの地域遺産をそのまま生きた博物館と捉え、現地で保存・展示・解説する仕組みのことである。また、それらの地域遺産を研究や生涯学習の場として生かし、地域社会の発展に寄与する役割も担っている。

博物館活動を行う上で必要な3つの要素は「場所」「モノ」「人」である。従来の博物館の場合、「場所」は

博物館という建物の中であり、「モノ」は資料や収藏品、「人」は学芸員や来館者である。

エコミュージアムの場合、「場所」は地域であり、どんな範囲でも自由に設定できる。住民が数名の小さな集落を博物館と考えることもできるし、桜島をまるごと博物館と捉えることもできる。「モノ」はその地域内にある自然・文化・産業などの地域遺産であり、そこにあるからこそ意味があるものを展示物と考える。従来の博物館は収集することが重要な役割の一つだが、エコミュージアムの場合は収集するのではなく、現地保存することが基本コンセプトである。「人」は地域のことに一番詳しい住民が中心となる。地域を訪れる来訪者に対して解説する場合もあるが、地域の子供たちに地域のことを伝承するという役割も担っている。

エコミュージアムの本場であるフランスでは、地域遺産を保全する小さな博物館(サテライトミュージアム)があり、それらを結ぶネットワークを構築することが重要とされている。つまり小さな博物館の集合体がかエコミュージアムなのである。しかし、日本の現状では地域遺産を保全する博物館を多数つくり、そこに学芸員を常駐させるのは非常に難しい。そこで、桜島ミュージアムでは博物館をつくらなくても地域遺産を活用できる方法として、エコツアーの手法を取り入れた。

本物を体感させるエコツアー

日本旅行業協会によると、エコツアーとは「自然を観察したり体験しながらその仕組みを学んだり、生

き物や自然環境を保護する活動に参加したり、昔の貴重な遺跡を知り、それを大切に守ったりする、自然にやさしい旅行や、地球と仲良くする旅行のこと」とされている。私なりの言葉で簡単に言い換えると、エコツアーとは「そこでしか味わえない本物を体感するツアー」となる。

このようなエコツアーが盛んに行われているのは、海外ではエクアドル、オーストラリア、コスタリカ、マレーシアなどである。国内では北海道、長野(軽井沢)、鹿児島(屋久島)、沖縄(西表島)などで盛んである。これらの地域に共通しているものは「自然豊かな土地」ということだが、そこで行われているツアーは、森歩き、山登り、沢登りなど、昔の子供なら普通に近くの野山で遊んでいた内容である。

このようなツアーに多くの人がお金を払って参加するのは、そこでしか味わえない本物の魅力を解説してくれるインタープリターの存在が大きい。インタープリターとは、単なる情報の提供ではなく、実体験や教材を通し、事物や事象の背後にある意味や関係を解説するガイドのことである。見える景色の裏側に隠されたエピソードやストーリーを語ることでツアーの価値を高めている。予備知識がない人にも感動を与え、そこでしか味わえない本物を体感させてくれるのがエコツアーなのである。

エコミュージアムとエコツアーの融合

地域遺産を保全する小さな博物館をつくらなくても、地域にある様々な遺産の「展示物」を「順路」に沿って「学芸員」が案内すれば、エコミュージアムと同じように地域遺産を堪能することができる。このように様々な「スポット」を「ルート」に沿って「ガイド」が案内すれば、それは観光ツアーである。観光ガイドの代わりにインタープリターが案内し、そこでしか味わえない本物を体感できるようにすれば、エコツアーと言える。桜島全体を博物館と考え、その中にある様々な地域遺産をめぐるエコツアーがあれば、エコミュージアムとエコツアーは融合することができる。

この考えを実践するため、2002年に「桜島友の会」



写真1 火山体感ツアーの様子



写真2 アウトドアツアー(シーカヤック)の様子



写真3 歴史散策ツアーの様子



写真4 溶岩加工体験ツアーの様子

という任意団体を立ち上げ、地域遺産の再発見を始めた。これまであまり脚光を浴びてこなかったものにもスポットライトをあて、調査・研究を行い、その意味や価値を見出した。そして、再発見した地域遺産をエコツアーという形で案内するイベントを企画し、桜島の魅力を伝える活動を始めた。

エコツアーの実践

桜島友の会では、桜島の地域遺産を現地で体感できるツアーを毎月1回程度のペースでイベント的に実施してきた。ここではその一部を紹介する。

【火山体感ツアー】桜島の最大の魅力は何と言っても世界有数の活発な火山であることだろう。しかし、意外にも火山としての特徴をきちんと解説するツアーや博物館はない。そこで、一般的な観光ルートに火山の解説を付けながら巡るというツアーを企画した。大正時代の大噴火の様子が読み取れる地層や大噴火で埋没した鳥居の見学、様々な溶岩地形ができる様子や火山噴火の仕組みの解説などを行った。

【火山アドベンチャーツアー】普段は絶対に行かないような火山の奥の奥まで入り込む少しマニアックなツアー。大正時代や江戸時代の大噴火の際の火口跡に立つ体験や、グランドキャニオンのような高さ数十mの渓谷で噴火の歴史が読み取れる地層の解説を行った。

【自然観察ツアー】動物や植物の観察を通じて火山地域独特の自然を体感しその仕組みも学ぶツアー。

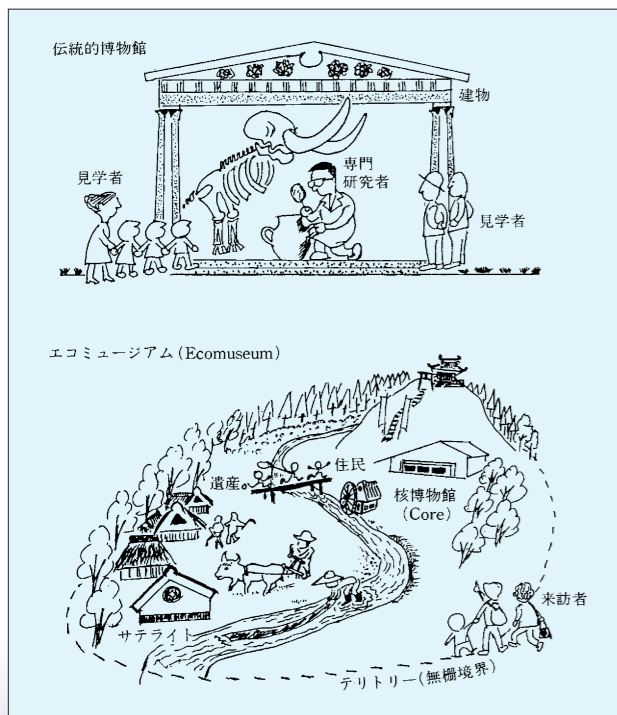


図1 従来の博物館とエコミュージアムの違い(概念図)



写真5 管理運営を行っている桜島ビジターセンター



写真6 火山ガイドツアーの様子

溶岩によって植生が破壊され、何もない状態から自然に回復してきた植生遷移について本物を見ながら解説した。桜島は様々な時代の溶岩があるため、数百年間の植生の変化の様子を一日で観察できる非常に貴重な場所だ。

【アウトドアツアー】シーカヤックやマウンテンバイク、ダイビングなどのアウトドアスポーツを通して桜島を思いっきり体感し、その仕組みも学ぶツアー。シーカヤックのイベントでは海中温泉や砂浜を掘って出てくる温泉も体感し、火山のパワーを感じた。

【歴史散策ツアー】歴史上ゆかりのある場所や伝説の元になった場所を訪れ、ガイドが解説するツアー。桜島には縄文時代から人が住んでおり、考古学的な遺跡(貝塚)や、関ヶ原の戦、西南戦争、薩英戦争などとゆかりのある史跡がある。数々の史跡を巡りながら桜島の歴史と火山噴火の関係も解説した。

【文学散歩ツアー】句碑や文学碑を散策し、作者の心情や背景をガイドが解説するツアー。桜島にはその異様な風景に惹かれ多くの文学者や歌人、俳人が訪れている。そのため数多くの文学碑・歌碑・句碑があり、それらを巡りながら作者が訪れた当時の情景と作品、そして現在の風景を比べながら文学について解説した。また、実際に俳句を作ってお互いに披露した。

【農業体験ツアー】桜島大根や桜島小みかんの収穫を体験し、大地の恵みを体感するツアー。桜島大根の場合は種を植え、追肥や間引きをし、最後は収穫して料理して食べるという長期的なイベントも行った。

【漁業体験ツアー】養殖ブリの水揚げなどを体験し、海の生き物や環境について学ぶツアー。桜島はブリやカンパチの養殖が盛んであり、島の周りの海

にはたくさんの生簀いけすが浮かんでいる。その生簀の近くまで漁船で近づき、エサやりの様子を見学し、漁船クルージングを楽しんだ。

【陶芸体験ツアー】桜島の火山灰を使った独特の陶芸を体験するツアー。桜島の火山灰や温泉水など地元の素材を使い、手びねりで皿やコップをつくり、世界に一つだけの陶芸品をつくった。

【溶岩加工体験ツアー】桜島ならではの溶岩加工を体験するツアー。溶岩を切断する巨大なカッターや表面を磨く機械などに触れてもらい、溶岩プレートにはオリジナルの模様を刻み込んだ。

桜島ミュージアムの事業

この桜島友の会の活動をより本格化させるため、2005年に「NPO法人桜島ミュージアム」を設立した。当初は国のモデル事業や助成事業などに応募し、地域資源の調査や地域振興のためのモデル的な取り組みを実践、報告することで事業費を確保した。これらの事業を通じ、約6年かけてようやく桜島ミュージアムの運営体制の基礎ができあがった。現在の主な事業は、①桜島ビジターセンターの管理運営、②体験型観光の総合コーディネート、③桜島産椿油のブランド商品化・販路拡大などである。

① 桜島ビジターセンターは、桜島の噴火の歴史や自然について映像や模型等で紹介する展示施設で、2009年から鹿児島県の指定管理者として桜島ミュージアムが管理運営を行っている。桜島ミュージアムが管理するようになってから、ボランティアガイドの配置、展示内容の改善、ガイドウォークやイベント等を実施している。以前は年間入館者数が5万人程度であったが、2011年には約10万人となった。現在はエコミュージアムの拠点施設として重要な役割を果たしている。

② 桜島ミュージアムは体験型観光の推進を最も重要な事業と位置付けており、体験プログラムの開発、受け入れ体制の整備、広報、予約受付等の総合コーディネートを行っている。また、修学旅行向けの体験学習プログラムの提供や、個人向けの火山ガイドツアー、シーカヤック体験なども行っている。これらの体験プログラムを通して桜島や火山について興味を持ってもらうことが桜島ミュージアムの重要な目的の一つである。しかし、ガイドやコーディネートだけでは十分な収入を得ることは難しいという側面もある。

③ 桜島産椿油のブランド商品化・販路拡大事業には二つの目的がある。一つは、ガイド業だけでは十分な収入が得られないため、物品販売等で収入を補うこと。もう一つは、椿油事業が桜島の新しい産業となるように発展させ、地域社会に貢献することである。椿油の原料となる椿の種子は、主に桜島に住む高齢者が拾い集めている。この種子を安定的に買い取る仕組みができれば、地域の高齢者が収入を得られるだけでなく、畑へ出て体を動かすことで健康維持にもつながり、ひいては介護予防や医療費の削減にも寄与することが期待される。このように地域社会に貢献しつつ収益を上げるような事業形態のことをソーシャルビジネスという。桜島ミュージアムが事業を継続的に行うためにはソーシャルビジネス等による資金確保が重要な課題となる。

以上のような事業のほかにも、2005年から継続する地元中学校の総合的な学習の時間の年間サポート、桜島や火山について解説する講演会、地域活性化を目指す協議会の事務局サポートなども行っている。なお、これまでの実績が評価され、2011年には第7回日本エコツーリズム大賞の特別賞を受賞した。

エコツアーの課題

桜島ミュージアムはエコツアーを通して桜島の魅



写真7 新しく商品開発した桜島の椿油



写真8 椿油の原料となる椿の種子



写真9 桜島ちやぶちやぶカヤック体験の様子

力を知ってもらうことを目指しているが、エコツアーだけで収益を上げることは非常に難しい。エコツアーの先進地でもガイド事業だけで成り立っている所は少なく、ほとんどはアウトドアスポーツの体験で収益を上げているようである。日本人は「話を聞く」ことに対してお金を払う習慣がないため、ガイドは無料か、有料でも500円程度だと思っている。エコツアーを推進するためにはこの状況を変えていく必要があるが、日本人の考え方や文化を変えることは容易ではない。ところが、非日常的な乗り物、体験などに対しては日本人でもお金を払う。たとえば、シーカヤックやパラグライダーなどの乗り物、ダイビングやガイドが必要な特殊な登山などの体験だ。そこで、桜島でもシーカヤックでエコツアーが実施できる体制を整えた。実は、桜島の溶岩は海から眺めた方が良く見えて迫力もあり、陸上のガイドツアーとは違った面白さが詰まっている。

我々の活動はまだ始まったばかりだが、今後も様々な特別な体験を提供し、娯楽性や収益性を確保しつつ、桜島とともに暮らし、桜島の魅力を伝える活動を続けてゆきたい。